# 祇園囃子

きむ　キョンヒ

足音をたて走ってきた健ちゃんが突然、下向き加減に頭を下げ歩いていた玉子ちゃんの肩を突き「朝鮮人朝鮮人パカ（ばか）にするな、同じ飯食ってとこ（どこが）違う」とはやし立てた。

玉子ちゃんの目から涙が溢れ出た。私は玉子ちゃんの手をぎゅっと握った。玉子ちゃんの手を伝わって、私の目にも涙が一杯になった。

玉子ちゃんはいつも継ぎはぎの同じ服を着ていた。勉強は普通であった。玉子ちゃんの家は私の父が経営している工場に近い公園の一角にあった。トタン屋根の、今にも倒れそうな家だった。

玄関のガラス戸を引くとガラガラと音を立てる。入ると土間があり、ちょっと高くなった所に障子があって視野を遮る。板の間と奥の畳の部屋とは襖で仕切られていた。部屋に沿って土間がつづき、裸の水道、七輪、焚き木、炭などが隅に無造作に置かれていた。何処かで拾ってきたのか剥がれかかった板の食器棚があり、その中には形の揃わない器が整頓され並べられていた。

玉子ちゃんの家が父の工場の近くでもあり、学校の帰りに彼女の家によく立ち寄った。彼女はとても優しい性格だ。

学校から帰るとお掃除をする。古木の板の間であったが、いつもきれいに拭かれ

**きむ　きょんひ**

大阪出身。韓国に行き日本語教師。韓国の延世大学にて国文学科言語学。延世大学大学院にて韓国現代文学修士。

ていた。壁に打ちつけられている釘には服やかばんなどが吊り下げられ整理されていた。破れた襖も、新聞紙を花形に切り、貼り付けてあった。

ご両親はリヤカーを引いて古物や古着、古鉄類をもらい歩き、夕方遅くに帰って来る。家の仕事は長女である彼女の役目だ。弟妹たちの世話、食事の支度など、主婦のように家事一切工夫し、貧しいのに、楽しそうに一生懸命生きている。幼な心にもそんな彼女に惹かれていた。

がき大将の朝鮮、朝鮮とはやし立てる言葉に内気な私は玉子ちゃんの手を握ってあげるだけで何もできなかった。

その日の夕食後、母に言った。

「あら、あなたも朝鮮人よ。その男の子引っ叩いてやればよかったのに」と母は叱るように言った。

それから彼女をもっと身近に感じるようになり、前よりもっとよく手をつないで帰るようになった。

五年生になって、玉子ちゃんとクラスが別になり会えなくなった。内向的な私は新しいクラスの友達に馴染むのに必死だった。

一か月ほど過ぎたころ、玉子ちゃんの家に行ってみた。誰もいない。

「どうしたのかな」

またしばらく経って行ってみた。無かった。家が無い。

「どうして」

私はひとり呟きながら父の工場に行き、職員さんに尋ねた。

「ああ、あそこね。不法建築だったので追い出されたんだよ」

私の目から大粒の涙があふれ落ちた。

結婚し、長男が小学校一年のときだった。

「朝鮮って何？　お友達が朝鮮、朝鮮と苛めるんだよ」

心のポケットの奥深く仕舞い込んでいた悲しい追憶が蘇った。

『まだ幼い息子にどう説明したらいいのだろう。そうだ韓国に行ってみよう。何か答えがみつかるだろう』

十月の下旬、学期中であったが、子供の担任の先生に事情を説明し、家族と韓国へ二週間の予定で旅に出た。

出発の日、大阪空港は台風であった。強風の影響で五時間遅れとなり、済州島（チェジュド）に着いたのが夜の七時頃だった。タラップを降りた時だった。

「ママ、ダイアモンドだ」

下の子が空を指差した。

「本当だ」

上の子たちも空を見上げ叫んだ。

ジャンプすれば手が届きそうな、深い藍色の空にダイアモンドを散りばめた様に星が輝く。飛行機は遅延したが、『夜空の神様は、私たち家族に素晴らしいプレゼントを下さった』と胸が熱くなった。

一週間を故郷の済州島で過ごし、ソウルへ向かった。

韓国は朴大統領の維新の後で、戒厳令が敷かれていた。至る所で兵隊が目に飛び込んでくる。ソウル市庁前では戦車や軍人が立っていて子供たちは大喜びだ。

「ウルトラマンはどこ？　インベーダーを向い撃つための戦車でしょう」

「そうね。軍人さんが護ってくれているわね」

「そうだよ。ウルトラマンは強いんだよ。敵を倒し最後は僕たちを護るの」

子供たちは自分たちのヒーローの話に興奮していた。

帰国後、長男はクラスの友達の前で、ダイアモンドの星空の話、ソウルで観た戦車の話など誇らしげに話したと、先生から我が家に電話があった。

渡哲也。もと日活映画のスター。日活映画といえば国籍不明のアクション・タフガイが売り物（純情ものもあったが）。アクションものが嫌いだった私は渡哲也という名前は知ってはいたが、食わず嫌いで彼の映画は観たことがなかった。

韓国の大手企業の三星で日本語を教えたことがある。会長の鶴の一声でグループ全体が「左遷」という映画を観ることになった。日本語教室の上級クラスでは、日本語版を観た。そのとき初めて彼の出演する映画を観たのだ。誠実で人情味のある主人公は、ある事件がきっかけで、いわゆる植物園という肩たたき族の部署に配置となる。そこで繰り広げられる色々な出来事がストーリーだ。

その映画がきっかけで渡哲也のファンになった。五、六年ほど前だったと思うが、彼が主演するテレビ『祇園囃子』が放映されると予告があったので、手帳に日にちと時間とチャンネルを書き込んだ。その日は夕飯もそこそこにテレビの前に座った。

主役の渡哲也は、アメリカ駐在中、他の駐在員の濡れ衣から産業スパイの疑いを

かけられる。その後、死んだと思われていたが、アメリカ人になり成功を収め、京都に帰ってくる。日本人としての前歴を隠し、アメリカ人として京都に戻ってきた彼は、昔の後輩に会う。

「親が亡くなったと知らせを受けた時も、息子が死んだときも泣かなかった。京都に帰って来て祇園囃子を聴いたとき、涙が出たね」というセリフがある。

主人公の過去の事情を知った日本の護衛官と、酒を飲み交わすシーンで

「あなたは最後にどちらの土に帰りたいですか?日本、アメリカ」

「……」

「ええ、わたし?」

思わずわたしは私自身の答えを探していた。

「朝鮮人、朝鮮人……」と言われて以来、ずっと心の中に渦巻いていた想いを遂げるため、三十年前、自分の国を求め、初めて（正確に言えば二度目）行った韓国。

韓国を知るために言葉を習い、韓国の文化を学び、歴史をもひもといた。人と接することにより慣習や考え方を知ろうと努力もしたが何かが違う。全ての事柄に対して外から目線で観て、学んでいるのだ。

夏祭りの季節、日本に一時帰ったとき、祭囃子に心を浮き浮きさせ、神輿の通り過ぎるのを夢中になって見ているわたしがいた。韓国の故宮の庭を歩く時より京都の名所の庭を歩くとき、心が和むのは何故なんだろうか。

韓国へ行くと言い、日本に帰ると言うわたしがいる。

韓国人でもなく、日本人でもないわたしがいる。

わたしはどちらの土に帰るのだろうか。